

献辞

経済学部社会システム学科の大谷欣也教授は平成20年5月14日に満65歳の誕生日を迎えられ、平成21年3月31日をもって定年退職されることになりました。

大谷先生は、昭和41年3月に早稲田大学第一文学部文学学科独文学専修を卒業された後、同年4月早稲田大学大学院文学研究科修士課程独文学専攻に進学、昭和43年3月に同修士課程を修了されました。

昭和43年4月に、先生は愛知県立大学助手に就任され、大学教員としてのキャリアをスタートされました。その後、昭和46年10月に滋賀大学講師(経済学部)に着任され、昭和49年9月助教授、平成3年教授に昇任されました。先生は、37年余の永きにわたり滋賀大学経済学部の教育と研究に尽力されたこととなります。平成3年には滋賀大学の永年勤続表彰を受けられました。

先生の研究について概略を紹介させていただきますと、まず、神秘的宗教的詩人のアンゲルス・シレシウスについて、その代表作『ケルビムのごとき旅人』を中心として神との合一の実相を探求され、その成果が一連の論文となって現れました。

また、エドゥアルト・メーリケにおける自然と愛について論じ、さらに、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの長編叙事詩『パルチヴァル』、いわゆるアーサー王伝説の英雄の聖杯物語について、初めて霊的・神秘的・密教的解釈をほどこして論じられました。

その後、先生は長年目標としていたフリードリッヒ・ヘルダーリンの研究に取りかかられました。ドイツ留学のテーマも、ヘルダーリンの研究でした。そして、未だに定説なしとされている「アルプスの下に頌せり」という作品について、それが詩人の神秘的秘伝体験の結晶であるとし、それに関した一連の論文を発表されました。

先生は、以上の研究をまとめて、著書『神をもとめて—ドイツ文学論集—』

(1990年8月)を出版されました。

それ以後、先生の研究の対象は「形而上学」に向かいましたが、その新しい定義は、宇宙のすべての次元のあらゆる法則を探求し実践することとされ、その研究の一端は、『彦根論叢』のガイダンス特集第3号に掲載された「アクエリアス時代の目標—ドイツ語学習によせて—」にも示されているということです。

また、先生は文学にたずさわる者として、文学について研究されると同時に文学の創作活動にも取り組まれ、『静の舞』(日本短編小説叢書第6集)を發表されています。

さて、教育の分野では、先生は長年にわたって経済学部ドイツ語の教育に尽力されてきました。第2外国語の授業が2回生まで2コマあった時代を通じて、1回生時の2コマを同一の教員が担当して基礎文法を完全に終了する方法を取り入れるなど、他大学にはないユニークな教育システムを作ることによって、効果的なドイツ語授業を実践されました。また、そのほかに、「ヨーロッパ社会・文化論(ドイツ)」や「形而上学」を担当され、学生の幅広い知識の獲得に努められました。

学内行政については、激戦である入試委員、そして人事委員や国際文化講座長などを務められ、学部の運営に多大の貢献をされました。

社会活動としては、「国際クレマチス協会」の第1回日本大会(1999年)と第2回日本大会(2008年)の企画運営にたずさわり、両大会を成功に導いたということです。

先生はまた、落研の顧問をかつて務められました。落研は残念なことに今はなくなってしまいましたが、部員全員の芸名と先生の名前が染められた手拭いが残っていて、思い出の品として先生はそれを今でも大切にされているということです。同時期に先生は、陸上部の顧問も引き受けられていました。

大谷先生は、大学では、いつも元気に溢れ、闊達でおられました。大学内で先生とお会いしたとき、先生はいつも私に対して「役職お務めご苦労さんです」とねぎらいの言葉をかけてくださいました。ドイツ語の教育者であり、文学と

形而上学の研究者であり、また落研の顧問であり、さらには比叡山の僧籍者の関連分野まで扱う…など、先生にはいろいろなお顔があり、実に多面的な活躍をされました。そのような先生がこのたび経済学部から去られてしまうということは、本当に残念でなりません。

滋賀大学経済学会は、先生の多年にわたるご功労に対する敬意と感謝の気持ちを表すべく、『彦根論叢』の本号を、先生と親交のある方々の論文によって編集いたしました。ご退職の記念として、謹んで先生に献呈させていただきます。

先生におかれましては、今後ともますますご健勝にて過ごされますように心よりお祈り申し上げます。

平成21年1月

滋賀大学経済学会長 小西中和